

川崎病冠動脈障害の長期経過観察

— γ -グロブリン療法とアスピリン療法後の比較—

(分担研究：川崎病の疫学的研究)

古庄巻史,¹⁾ 神谷哲郎,²⁾ 中野博行,³⁾ 清沢伸幸,⁴⁾ 四宮敬介,⁵⁾ 林寺 忠,⁶⁾ 広瀬 修,⁷⁾
真鍋 稔,⁸⁾ 瓦野昌治,⁹⁾ 横山達郎,¹⁰⁾ 田村時緒,¹¹⁾ 森 忠三,¹²⁾ 馬場 清,¹³⁾ 馬場国蔵,¹⁴⁾
瀬戸嗣郎,¹⁵⁾ 城尾邦隆¹⁶⁾

要約 われわれはすでに川崎病における γ -グロブリン療法(IVGG療法)において、発症1ヶ月前後の冠動脈障害(CAL)がアスピリン療法(ASA療法)に比し、有意に低下することを、3つの controlled studyによって明らかにした。その際に対象となった症例について、さらに2年にわたってCALの残存率を検討したところ、ASA療法に比し、IVGG療法を行うと、長期的にみてもCALの残存率が低いことが認められた。

見出し語： γ -グロブリン療法、冠動脈障害の長期経過観察

研究方法 1983年4月から1986年6月まで表記16施設に入院した川崎病患児381例について、長期間(1~2年)にわたって、CALの残存率がどのように変動したかを検討した。

(1) Study 1(1983年4月~1984年4月)では γ -グロブリン(GG)400mg/Kg/日・5日間投与したIVGG療法群(40例)とASA療法群(45例)との2群比較

(2) Study 2(1984年5月~1985年9月)ではGGを100mg/Kg/日(41例)、200mg/Kg/日(51例)、400mg/Kg/日(51例)をおのおの5日間投与したIVGG療法の3群比較

(3) Study 3(1985年10月~1986年6月)ではGG 200mg/Kg/日・5日間投与+ASA療法(49例)、GG 200mg/Kg/日・5日間のみ(53例)、ASA療法のみ(49例)の3群比較

(4) 以上の3つのstudyの対象となった381例のうち、投与されたGG量に無関係にIVGG療法をうけた群(287例)とASA療法のみを受けた群(94例)の2群比較

上記の症例を対象に発症1ヶ月前、1ヶ月、2ヶ月、3ヶ月、6ヶ月、9ヶ月、12ヶ月、18ヶ月、24ヶ月を経過した時点で心断層エコー検査(2DE)を行い、CALの有無を検索した。CALは拡大性

1) 小倉記念病院小児科 (Pediatric Division, Kokura Memorial Hospital)

2) 国立循環器病センター小児科

3) 静岡県立こども病院循環器科

4) 京都第二赤十字病院小児科

5) 京都大学医学部小児科

6) 国立京都病院小児科

7) 大阪府立母子保健総合医療センター

8) 耳原総合病院小児科

9) 和歌山赤十字病院小児科

10) 近畿大学医学部心臓小児科

11) 天理よろず相談所病院小児循環器科

12) 島根医科大学小児科

13) 倉敷中央病院小児科

14) 神戸市立中央市民病院小児科

15) 公立甲賀病院小児科

16) 九州厚生年金病院小児科

病変を含めた全てのCALと拡大性病変を除く、いわゆる瘤を形成したCALの2群に分けて検討した。

結果 Study 1~3でのCAL残存率の長期観察結果を図1~3に示した。Study 1では川崎病発症後3ヶ月まではCALの残存率はIVGG療法群で有意に低値であった。それ以後もCAL残存率はIVGG療法群で低かったが、有意差はなかった(図1)。

Study 2ではIVGG療法を行った3群間には、長期的にみてもCALの残存率に差はなかった(図2)。Study 3ではASA療法群に比しIVGG療法群ではCALの発生が有意に低値であったが、発症1ヶ月以降は長期的にみて、IVGG療法を行った方が有意にCAL残存率が低いとはいえない(図3)。

Study 1~3の症例で、IVGG療法をうけた

ものとASA療法をうけたものとを比較すると、発症1ヶ月前~発症2年のいずれの時点においてもIVGG療法群は有意にCALの発見率が低かった。

なお、瘤の残存率についてはStudy 1~3を通じて各群間に長期的にみて有意差はなかった。

考察 以上の結果からIVGG療法(GGの総投与量を1000mg/Kg以上として、分割点滴する)により、川崎病急性期のCALの発生が有意に抑制されるのみならず、3ヶ月、6ヶ月、12ヶ月、18ヶ月、24ヶ月と長期的にみても、ASA療法に比してCALの残存率が低くなると考えられる。川崎病のCALは経過とともにその残存率は低下するが、2DEで見かけ上、正常となるもののなかに狭窄性病変を呈するものの、血管内皮細胞の著明な増殖を示すものもあり、要は急性期のCALの発生をいかに少なくするかが重要であると考えられる。

図 1 川崎病に対する免疫グロブリン療法の長期 follow up 成績

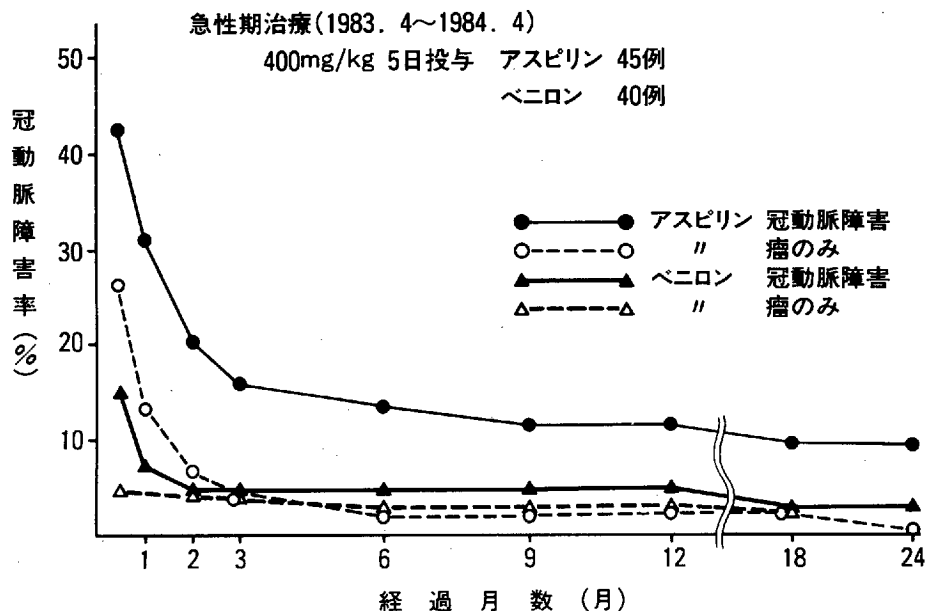


図 2 川崎病に対する免疫グロブリン療法の長期 follow up 成績

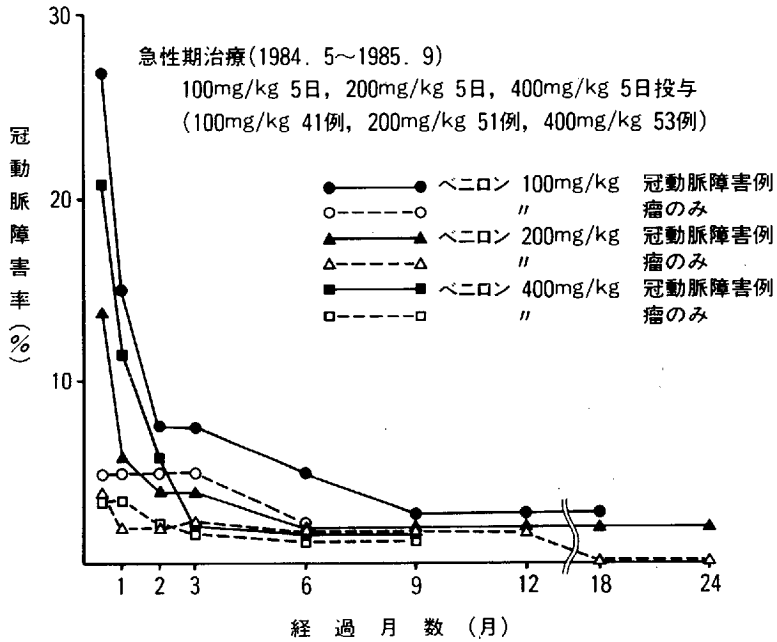


図 3 川崎病に対する免疫グロブリン療法の長期 follow up 成績

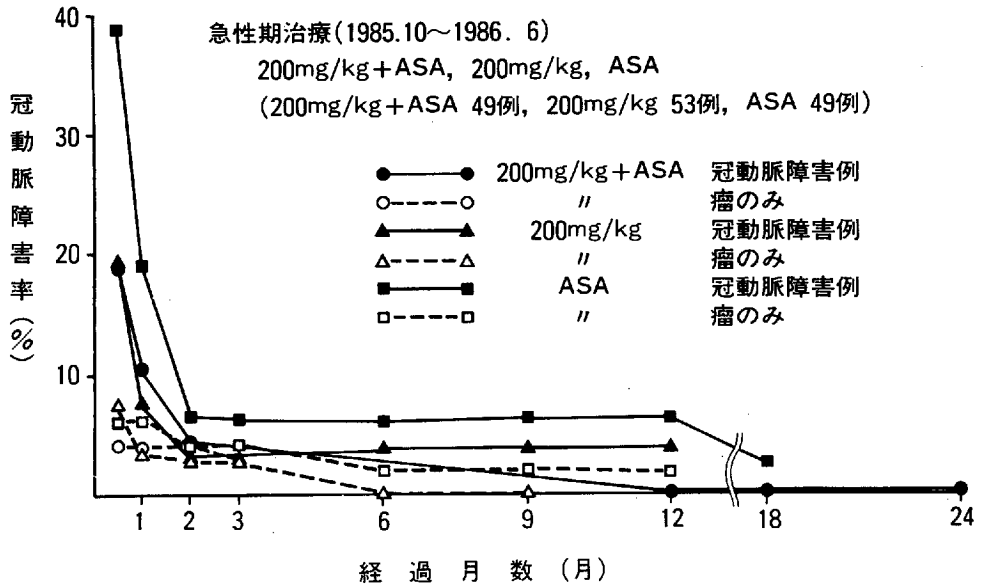
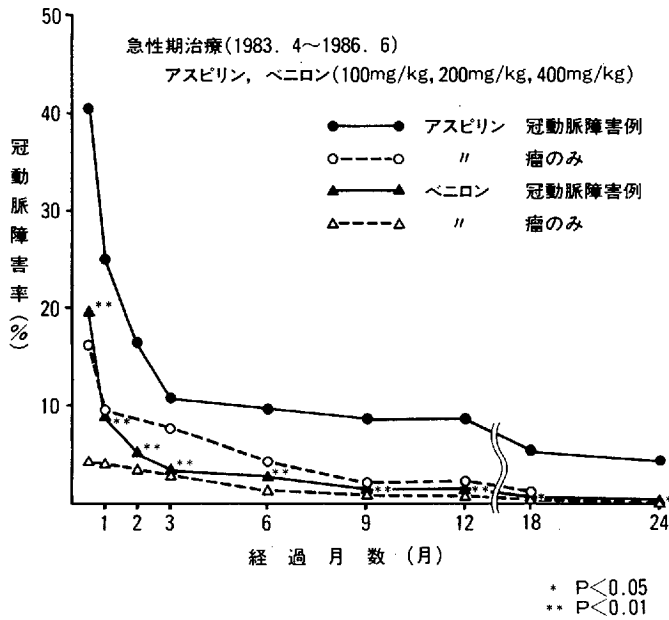


図 4 川崎病に対する免疫グロブリン療法の長期 follow up 成績



文 献

- 1) Furusho, K., et al.: High-dose intravenous gammaglobulin for Kawasaki disease. Lancet, 2: 1055, 1984.
- 2) Furusho, K., et al: Le traitement

- de la maladie de Kawasaki par administration intraveineuse de gammaglobulines, Med et Hygiene 45:1425, 1987.
- 3) 古庄巻史: 川崎病の現況. 免疫グロブリン製剤の使い方, 小児科 28:1043, 1987.

Abstract

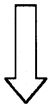
Long-term follow up study about the coronary artery lesion in children with Kawasaki disease treated by gammaglobulin and/or aspirin

Kenshi Furusho M.D.¹⁾

From April 1, 1983 to June 30, 1986, we studied about the efficacy of high-dose intravenous gammaglobulin (IVGG) to prevent the occurrence of coronary artery lesion (CAL) in 381 children with Kawasaki disease by three controlled studies. In the IVGG therapy, an infused dose of 1000mg/Kg in total, in divided doses, decreased the incidence to 14-20%. This incidence was significantly low as compared with that in the aspirin therapy (39-42%).

The greater part of CAL of Kawasaki disease is regressed and normalized apparently by echocardiography during the course. However, when the children being treated by IVGG, the presence of CAL was significantly decreased to 2.1% at 12 months and 0.7% at 24 months after the onset of the disease as compared with that of the children treated by aspirin (8.8% at 12 months and 4.5% at 24 months).

These results suggest that the IVGG therapy is effective not only to prevent the occurrence of CAL but also to prevent the persistence of CAL during the course.



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約 われわれはすでに川崎病における γ -グロブリン療法(IVGG療法)において、発症1ヶ月前後の冠動脈障害(CAL)がアスピリン療法(ASA療法)に比し、有意に低下することを、3つのcontrolled studyによって明らかにした。その際に対象となった症例について、さらに2年にわたってCALの残存率を検討したところ、ASA療法に比し、IVGG療法を行うと、長期的にみてもCALの残存率が低いことが認められた。